

異文化間夫婦に関する文献レビューと これからの展望

Incultural marriages: A review of the literature and future outlook

蔵本 真紀子
Makiko KURAMOTO

1. はじめに

国際結婚とはかつてはあらゆる障害を乗り越えて初めて実現できるというハードルの高いものであったが、グローバル化及びネットワークの発展が目覚ましい現代では国境を超えたりソースや人の移動が容易となり、かつて出会うことも珍しかった外国籍の人との出会いがますます身近になっている。厚生労働省（2016）が公表している人口動態統計年報によると、夫妻の一方が外国籍の婚姻数は昭和45年次ではわずか5,546件であったのが、2014年は21,130件にのぼり、26組に1組が夫婦のどちらかが外国籍となっている。対照的に、日本人同士の婚姻数は70年代をピークに減少傾向にある。また、60年代は妻日本人・夫外国人の組み合わせが国際結婚夫婦の全体の74%を占めていたが、その後徐々に減少し90年代には完全に逆転、2005年には20%に下がった。しかし、2010年から妻日本人・夫外国人の組み合わせが24%、27%と微増を続けている。

結婚生活とは、各々慣れ親しんだ習慣的方法を融合させ、新しい環境を子孫のために築き上げるプロセスである（Erikson, 1982/1989）。結婚そのものが、それまでに備わった個人の生活様式や信条や行動様式が家庭の場でせめぎ合う文化変容プロセスであるといえる。さらに、親密な男女のコミュニケーション問題の多くは性役割観と関連し、多くの結婚に共通した課題である（プレーガー・ヒル, 2005）。このように異文化間夫婦は、同一文化間夫婦が経験する課題に加えて、互いの文化のすり合わせが必須となり、「二重の文化折衝」であるとされる（矢吹, 2011）。実際に多くの先行研究から異文化間夫婦は同一文化間夫婦以上にストレスを感じやすく関係性破綻に陥りやすいことがいわれている（Bhugra & De Silva, 2000; Crohn, 1998; Mann & Waldron, 1977; Romano, 2001など）。

本稿の目的は、主要論文検索サイトの掲載論文を整理し、異文化間夫婦を巡る先行研究の歴史と動向を明らかにすることである。そして、海外と国内の両方の研究動向を比較し、今後の研究可能性を探りたい。

2. 異文化間夫婦及び国際結婚夫婦についての先行研究

アメリカ、カナダ、イギリスなど多くの欧米諸国は多民族国家であり、異人種・民族間での結婚が古くから存在し、そうした課題を巡って研究の蓄積が進んでいる。以下、海外、国内の先行研究の動向を概観する。尚、海外での研究は異人種間カップル、異民族間カップル、異文化間カップルと様々な用語を使っているため、検索する際もそれらの用語を含めるようにした。

2.1. 海外での研究

ProQuestにて、学術雑誌に掲載されている論文を、interracial couples/marriage, intercultural couples/marriage, cross cultural couples/marriage, intermarriage¹, interethnic couples/marriage, cross national couples/marriage, international couples/marriageというキーワードで検索すると687件がヒットした²。90年代以降右肩上がりに上昇していることが明らかになった (Figure 1参照)。

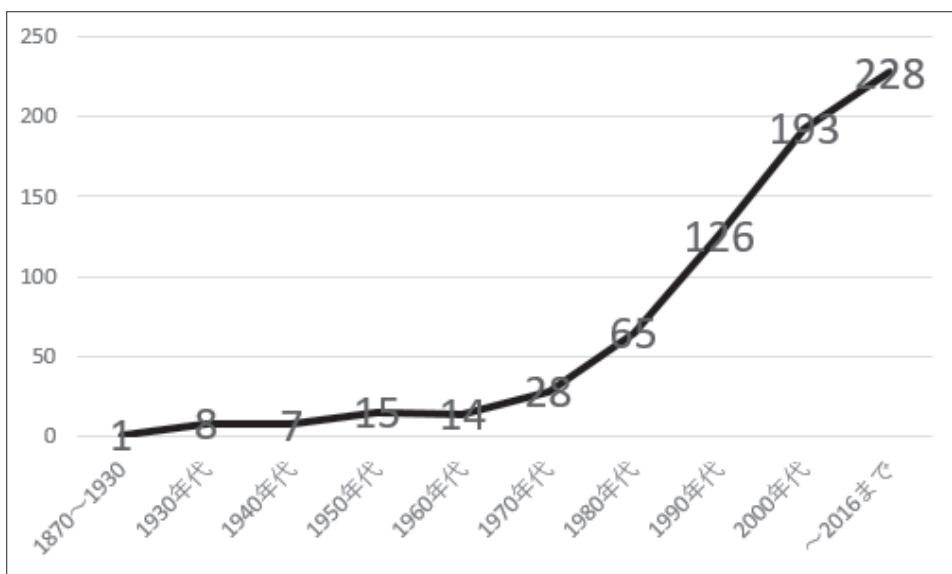


Figure 1. ProQuestでの異人種・民族・文化間カップルに関する文献数の推移。

年代毎に文献の傾向をその内容、掲載誌、方法論の3点でまとめたのがTable 1である。

¹ Intermarriageには血縁者同士の結婚なども含まれるため、検索結果からあくまで異人種異民族異文化間カップルを対象としたものに限定した。

² 検索でヒットした文献の中から、テーマ外と判断された文献はあらかじめ除外した。

Table 1 異人種異民族異文化間カップルに関する研究の年代毎のまとめ

年代	論文数	掲載論文の動向	方法論	掲載誌
1870～1930	1	最も古い文献はアイルランドの経済学者であるHancock (1879)で、フランス人やその他外国籍の者と結婚したアイルランド人女性やイギリス人女性が多く苦難を強いられるも、評論社会的に彼らを援護する状況にないとし法的整備を訴えている。		Journal of the Statistical and Social Inquiry Society of Ireland
1930年代	8	ハワイの異人種間結婚に関する論文が8件とハワイ発信の報告が多い。	統計研究、評論	International marriage in Hawaii, Psychological Bulletin, Journal of the American Medical Association など
1940年代	7	掲載数は30年代とほぼ同等。ミネソタ、シカゴでの異人種異民族間夫婦の実態など統計研究が主。	統計研究、評論	Statistics Bulletin, American Journal of Sociology, Eugenics Review など
1950年代	15	異人種・異民族間の増加に伴い、掲載数も上昇する。地域レベルでの国際結婚夫婦の調査のほか、異人種・異民族間結婚の要因、社会階層、分類のほか、異文化間結婚に関する理論も発表されるようになる。学術雑誌はSocial Forces, Sociology & Social Research など社会学系が主である。	統計研究、評論、レビュー	Social Forces, American Sociological Review など
1960年代	14	異人種異民族間夫婦に見られる精神病理についてのケーススタディや精神病理についての臨床報告が増加する。デモグラフィックデータを分析した報告も依然多い。	統計研究、評論、レビュー	Annals of Medical Psychology, Social Psychiatry, Journal of Marriage and the Family, American Sociological Review など
1970年代	28	論文及び掲載雑誌の数が増加する。領域は社会学、社会生物学、人類学、家族セラピー、心理学研究、公衆衛生学、精神医学、行動科学など多岐に渡っている。地域学的、社会学的な研究が中心だったが50年代から格段に発展し、精神力学、ケーススタディ、カップルセラピーなどより心理面に着目した研究が見られ始める。	統計研究、ケーススタディ、レビュー、質問紙	Population Studies, Demography, Social Casework, International Journal of Sociology of the Family, Journal of Sex & Marital Therapy, Family Therapy, Psychological Reports など
1980年代	65	研究領域では配偶者選択や社会的要因についての議論が活発に行われ始める。ヨーロッパ系アメリカ人とアジア系、ヒスパニック系、アフリカン系アメリカ人の異人種・異民族間研究が盛んになる。異文化間夫婦のためのコミュニケーショントレーニングの研究も登場する。またイスラエル、シンガポール、ナイジェリア、ロシアなどアメリカ以外の国からの論文も増加する。また、異民族間で生まれた子どもの適応やアイデンティティについての研究が登場した。掲載誌についてはファミリーセラピーや家族心理学が目立つようになる。	統計研究、ケーススタディ、レビュー、質問紙、面接	Journal of Comparative Family Studies, Marriage & Family Review, Journal of Marriage and the Family, American Sociological Review, Journal of Family Therapy, Social Biology など
1990年代	126	顕著に論文の数が増加している。カップルセラピーやファミリーセラピーといふ臨床的研究も蓄積されるようになり全体の12%を占める。ヨーロッパ系アメリカ人と非ヨーロッパ系アメリカ人の研究が多く、その内容は人種差別やその他社会的阻害要因に関するものが中心である。異人種・異民族間夫婦のもとに生まれた子どものアイデンティティや親による子どもの誘拐など子を巡る諸問題についての研究も増加している。アメリカの社会学者コットレルが90年代から80年代までの異文化間結婚に関する論文のレビューを発表している。	レビュー、ケーススタディ、質問紙、面接	Journal of Comparative Family Studies, Contemporary Psychology, Journal of Social and Personal Relationships, Sociological Perspectives, Journal of Cross-Cultural Psychology など
2000年代	193	2000年代はITバブルの崩壊や、アメリカの不動産バブル崩壊など地球規模で金融危機が同時多発的に生じほとんどの国が景気後退となった。そうしたネガティブな社会情勢に呼応するものとして、異人種・異文化間夫婦に関する研究については、離婚、関係性破壊、DV、ストレス、ジェンダー意識、家族問題、人種差別や偏見に着目するものが目立つ。一方で、相互理解や建設的なコミュニケーション、葛藤対処、文化的統合などポジティブな側面に焦点を当てる研究も多く発表されている。また、ヨーロッパ系非ヨーロッパ系夫婦の結婚動向をまとめたものや宗教を絡めた異文化間結婚の考察など新たなトピックも登場している。また国際結婚をした女性のナラティブ研究など質的方法も数件とわずかながら見られる。	レビュー、ケーススタディ、質問紙、面接	International Journal of Applied Psychoanalytic Studies, Social Science Research, Transcultural Psychiatry, Clinical Social Work Journal, Family Therapy など
～2016まで	228	5年で過去10年と半数を超えていることを鑑みるとこれまでの年代で過去最高となることは必至である。ヨーロッパ、アフリカ、日本を含めたアジア諸国での研究もますます増えている。従来同様、異人種・異民族間夫婦のDV、ジェンダー意識、ストレスやコペイング、カップルセラピーに関する研究のほか、異民族間結婚における家族・社会的障害、余暇の過ごし方、結婚満足度調査、移民と異文化間結婚などのトピックも増加した。また異人種・異民族間結婚に関する本のレビューも数件見られる。面接調査の増加も特徴的。	レビュー、ケーススタディ、質問紙、面接	Journal of Marital and Family Therapy, Journal of Cross-Cultural Psychology, Journal of Black Studies, Journal of Comparative Family Studies, Journal of Family Issues など

最も古い文献はアイルランドの経済学者であるHancock (1879)で、フランス人やその他外国籍の者と結婚したアイルランド人女性やイギリス人女性が多く苦難を強いられているにも関わらず、彼らを援護する社会システムが存在しないと法的整備を訴えている。

Hancock (1879) 以降は、関連テーマの論文は1930年代まで存在しなかった。30年代は学術雑誌に掲載されている論文が8件見つかった。多くがハワイ大学からの論文である。多文化国家を代表するアメリカの中でも、ハワイは先住民をはじめ、ヨーロッパ系、日系、中国系、フィリピン系、ベトナム系などの移民が多く極めて多民族の社会である背景から、地元ハワイ大学では異人種異文化間交流に関する研究のパイオニアとして貢献してきた。例えばPorteus (1939) は、ハワイにおける異人種間結婚について社会学的観点からまとめたAdams (1937) のレビュー論文である。

1940年代の掲載数は7件であった。ミネソタ州やシカゴでの異人種・異文化間カップルの実態など属性データをまとめた報告が中心である。

1950年代のヒット数は15件であった。社会学の分野で主に発展している。大半が収入、人種・民族、性別といった属性データを分析したものである。例えば、ワシントンやロスアンゼルスにおける国際結婚の諸相を調査した研究(Annella, 1956; Risdon, 1954) や660組の異人種・異文化間カップルの属性データを分析し、異人種・異文化間結婚を予測する要因(民族、職業、言語、収入など)を提示しているMarcson (1953) がある。

60年代の掲載数は14件と50年代とほぼ同数であるが、顕著な違いが見られる。1964年にTranscultural Psychiatryが創刊されるなど、臨床面に焦点が移るようになりメンタルヘルスといった臨床系の報告(Bourgeois & Hebert, 1969; Saucier, 1967など)が増加したことである。例えばSaucier (1967) は、異人種間夫婦は同一人種間夫婦に比較し、より抑うつ傾向や神経症を呈しやすく、子育てに難しさを感じやすいことを報告している。

70年代に入ると、28件がヒットした。地域レベルでの国際結婚の諸相をまとめた研究(Glick, 1970; Monahan, 1970; Norton, 1970など)のほか、掲載誌の分野は社会学、社会生物学、人類学、家族セラピー、心理学研究、公衆衛生学、精神医学、行動科学など多岐に渡りはじめる。身近に増え続ける異人種・異民族間夫婦に対するサポートの必要性が高まった。こうした背景から、現在異人種異民族カップルについての研究を最も多く掲載している学術誌の一つであるJournal of Comparative Family Studiesが1970年に創刊されたほか、異人種・異民族間夫婦の精神病理(Melon, 1972; Saucier, 1970) やカップルセラピー(Atkeson, 1970; Wold, Yoon, & Mayo, 1977) についての論文が増加している。例えば, Ratiff, Moon, & Bonacci (1978) は韓国の米軍基地で知り合ったアメリカ人夫と韓国人夫婦の結婚生活の破綻に着目し、価値観の違いや双方の文化的ステレオタイプが関係性に亀裂を生んでいることを指摘している。また、いずれも異人種異民族間カップルを対象にしたものではないが、質問紙による実証的研究(Brigham, Woodmansee, & Cook, 1976; Martelle, 1970) もみられるようになる。例えばBrigham et al. (1976) では、大学生の異人種間結婚(とりわけヨーロッパ系とアフリカ系)や人種的平等に関する印象を測る尺度を開発している。70年代は、異人種異民族間のカップル及び夫婦が徐々に身近になり、異人種異民族間結婚は研究テーマとして注目を浴び始める時代となった。

1980年代の関連文献のヒット数はさらに上昇し65件であった。80年代は著しい経済発展が後押しとなり、異文化間交流が活発化した。その結果70年代に比較し、必然的に国際結婚や異人種・異民族間結婚がさらに増加した。研究領域では様々な人種や民族の組み合わせによる配偶者選択や社会

的要因についての調査が行われ始める。たとえば、アジア系と非アジア系アメリカ人では、Kitano, Yeung, Chai, & Hatanaka (1986), Kitano & Chai (1982), Rho, Schumm, & Walter (1989) などがあり、ヒスパニック系ではSalgado de Snyder & Amano (1982) などがある。古くから異人種異民族間夫婦に関する研究を先進的に行ってきたハワイ大学で、Graham, Moeai & Shizuru (1985) がハワイ居住の同一文化間夫婦と異文化間夫婦計170組を面接し比較分析した結果では、異文化間夫婦は同一文化間夫婦とは対照的に、文化的習慣や相手家族や友人との交流形式の違い、コミュニティとの関わり合いなどより外的な問題に直面していることを報告している。また、イスラエル、ロシア、シンガポールなどアメリカ以外の国からの論文も見受けられ始める。異文化間カップルのためのコミュニケーショントレーニングの開発を目指した報告 (Mansikka & Fukuyama, 1985) も登場する。また、異民族間で生まれた子どもの適応やアイデンティティについての研究 (Johnson & Nagoshi, 1986; Salgado de Snyder, Lopez, & Padilla, 1982) が登場した。このように対象となるテーマはますます多様化し、異人種・異民族間夫婦は様々な国で研究対象になるようになった。1件のみしか確認できていないが、異民族間夫婦63組を対象に面接を行った報告も見られた (Salgado de Snyder et al., 1982)。

1990年代の関連文献のヒット数は126件であり過去最高の伸び率である。90年代はグローバリゼーションという用語が90年代から頻繁に使用されるようになった通り、ヒト・モノ・カネの移動が地球規模で活発化する。経済的・文化的な境界がボーダーレス化し始め、同時に国際結婚、異人種・異民族間結婚はますます増加の一途を辿る。依然としてアメリカ発信の報告が大半である。中でもヨーロッパ系アメリカ人と非ヨーロッパ系アメリカ人夫婦の研究が目立ち、その内容は偏見やその他社会的阻害要因に関するもの (Majete, 1997; Paset & Taylor, 1991) が中心である。異人種・異民族間夫婦のもとに生まれた子どものアイデンティティや親による子どもの誘拐など子を巡る諸問題についての研究 (Hegar & Greif, 1994など) やカップルセラピーやファミリーセラピーといった臨床的観点からの論文も (Biever, Bobele, & North, 1998; Ibrahim & Schroeder, 1990など) も減少することなく報告されている。少ないが、異人種異民族間カップルを対象に量的研究を行ったケースも見受けられ始めた。例えば、Gains, Granrose, Rios, Garcia, & Youn (1999) が103組の異人種・異民族間カップルを対象に質問紙によるアタッチメントの調査を行っている。

2000年代の関連文献のヒット数は193件であった。2000年代はITバブルの崩壊や、アメリカの不動産バブル崩壊など地球規模で金融危機が同時多発的に生じほとんどの国が景気後退となった。Seshadri & Knudson-Martin (2013) が指摘する通り、この90年代は夫婦間葛藤やストレスなど異人種異民族間カップルについてネガティブに記述する論文が多い。例えば、離婚並びに関係性破綻 (Bratter & King, 2008; Leslie & Letiecq, 2004; Negy & Snyder, 2000)、ストレス (Bratter & Eschback, 2006; Solsberry, 1994)、人種差別や偏見 (Lewandowski & Jackson, 2001; Vaquera & Kao, 2005など) や性役割観の相違 (Kellner, 2009) があげられる。例えば Bratter & Eschback (2006) や Bratter & King (2008) では、異人種間夫婦は比較的重いストレスを抱えやすく離婚に至りやすい点、社会経済的地位も関係性の調整要因として一部寄与することなどを報告している。また、日本を含めたアジア諸国、オーストラリア、南米、ヨーロッパ発の論文も増加している。さ

らに、異人種・異文化間夫婦に関する本のレビュー、心理教育、政治・宗教を絡めた異文化間夫婦の考察など新たなトレンドも出現している。またナラティブ研究 (Killian, 2002; Nguyen, 2009) や面接調査 (Brunsma, 2007) など質的方法を取り入れた研究も少数派ではあるが見られるようになっている。さらに、Bhugra & DeSilva (2000) が述べているように、文化によって価値観、家族そのものの定義や、家族が果たすべき機能、各々の役割や様々な目標が規定され、異文化間夫婦にとって大きな火種となりやすいことから、こうした文化的背景を踏まえたセラピーを実施すべきことが主張されるようになる。

2010年から現在 (2016年9月時点) までの関連文献のヒット数は228件である。ヨーロッパや日本そしてその他アジア諸国での研究も格段に増えている。実証的研究もますます広がりを見せ、異人種・異民族間カップルと同一人種・文化間カップルの親密な関係における期待や態度の比較研究 (Hiew, Halford, van de Vijver, & Liu, 2015), DV (Fusco, 2010), ジェンダー観 (Galinsky, Hall, & Cuddy, 2013), ストレスやコーピング (Bustamante, Nelson, Henriksen, & Monakes, 2011), 余暇の過ごし方や結婚満足度調査 (Sharaievska Kim, & Stodolska, 2013), 移民と異文化間結婚、子どもの問題 (Yeh, 2014), 国際結婚をアレンジするブローカー問題といったように、オリジナリティに富む研究が増え、多様性が一層増してきている。書籍のレビュー論文が多い点も特徴的である。臨床面では、カップルセラピーに関する研究 (Kim, Prouty, & Robertson, 2012; Leslie & Young, 2015; Seshadri & Knudson-Martin, 2013など) がさらに増え続けており、異人種・異文化間夫婦へのサポートは多文化共生時代における重要な位置づけとなっていることが示唆される。方法論について、面接調査も近年ますます増加傾向にある (Inman, Altman, Kaduvettoor-Davidson, Carr, & Walker, 2011; Osuji, 2014; Rosenblatt & Stewart, 2012; Seshadri & Knudson-Martin, 2013など)。

総括すると、当初は実証的研究が非常に乏しく評論や公的な統計データを整理した実態調査が主だった。初期の研究の大半が社会学的アプローチであった。異文化間夫婦のメンタルヘルスやストレスに着目した臨床研究が見受けられるようになるが、精神医学系の雑誌が多いことからわかるように、異文化間結婚と精神病理が結び付けられる傾向にあった。その後、テーマは拡大していくとともに、当事者への面接調査や質問紙調査も見受けられるようになった。現在では、精神医学系の掲載誌はなく、異文化コミュニケーション、民族研究や家族臨床系の掲載誌が中心となっている。

論文の数は増加しているとはいえ、合計687件と決して多いとは言えない。カップル及び夫婦に関連した全体の論文約45,000件の1.5%ほどである。

2.2. 国内での研究

国内での研究は、Ciniiに取り上げられている文献³を検索した (Figure 2)。多民族国家の諸外国では、同じ国に住む異人種間/異民族間のカップルを扱うことがほとんどだが、現在の日本では元々外国籍である者との結婚が主流であるため「国際結婚」が唯一のキーワードである。

³ 週刊誌など学術雑誌と認めがたいものは除外した。

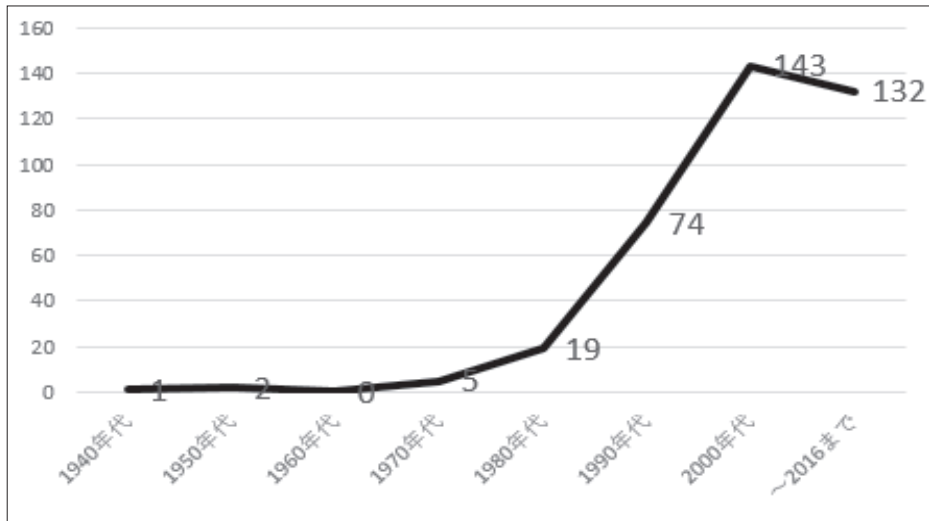


Figure 2. Ciniiでの国際カップルに関する文献数の推移。

Ciniiで国際結婚をキーワードに検索した結果をTable2にまとめた。

Table 2 Ciniiにおける国際結婚に関する研究の年代毎のまとめ

年代	論文数	掲載論文の動向	方法論	掲載誌
1940年代	1	最も古い文献は滝沢敬一の「国際結婚をのぞく」	評論	朝日評論
1950年代	2	国際結婚における諸問題に関する評論	評論	時の法令
1960年代	0			
1970年代	5	国際結婚における諸問題に関する評論（主に法に関する内容）	評論	法の支配、潮、ジュリスト
1980年代	19	テーマが広がり始めその内容は農村花嫁、戦後の国際結婚史、国際結婚を巡る精神病理、国籍法、国際結婚とその子どもたちなど。うち6件が農村花嫁について、5件が、国籍法や姓についてなど法的な内容となっている。	評論、レビュー、ケーススタディ	法学セミナー、あすの農村、精神科治療学
1990年代	74	農村花嫁、国際結婚史、国際結婚夫婦の夫婦関係、国際児の適応やバイリンガル教育など。国際結婚夫婦の関係性に関する実証的研究が始まる。	評論、レビュー、質問紙調査、面接	社会民主、臨床哲学、家族研究年報、発達研究、家族社会学研究、社会学評論など
2000年代	143	国際結婚夫婦のコミュニケーションに関する研究の活発化。外国人妻のメンタルヘルス、日本人妻の文化的アイデンティティ、子どもへの文化継承、国際結婚研究のレビュー論文など。	評論、レビュー、質問紙調査、面接	家族社会学研究、現代社会研究、言語文化と日本語教育、比較社会文化研究、多言語多文化研究、異文化間教育
~2016まで	132	国際結婚の夫婦間葛藤、国際結婚とコミュニティ、外国人妻への支援、国際児、言語教育及び文化継承、レビュー論文など。	評論、レビュー、質問紙調査、面接	日中社会学研究、異文化間教育、家族心理学研究、多言語多文化教育、日本語教育、歴史学研究など

最も古い文献は滝川（1948）の「国際結婚をのぞく」という評論であった。50代から70年代までの文献数は9件であり、全てが評論であった。国際結婚が巷で見聞きされるようになると共に、国際結婚にまつわる法的問題に関するテーマ（野田，1971など）が中心となっていく。その大半が家族問題や女性にまつわる法律に取り組む元札幌高裁長官の故野田氏による寄稿である。

1980年代のヒット数は19件であった。うち6件が過疎地域で嫁不足から日本人夫がフィリピン人

等のアジア系の女性と結婚するいわゆる「農村花嫁」に関して(国見, 1989; 佐藤, 1989など), 5件が国籍法の改正など法律問題に関して, そして2件が国際結婚をした日本人妻のうつ病といった精神病理に関して論述された報告(大西, 1987など)であった。

1990年代のヒット数は74件と格段に増加した。主に, 社会学の方面で発展し, 内容は過疎地域での国際結婚(疋田, 1999; 中沢, 1996; 佐藤, 1990など), 統計データを基にした国際結婚の実態調査(藤田, 1997; 厚生省大臣官房統計情報部人口動態統計課, 1990など), そして心身問題(陳, 1999; 大西・山寺・中山, 1995など)などのほか, いよいよ実際の国際結婚夫婦を対象とした研究も立ち上がり始めている(施, 1999; 鈴木・藤原, 1994; 竹下, 1997a; 1997b; 1998; 矢吹, 1997; 矢吹, 1998など)。その研究法は量的調査と質的調査の両方が存在する。前者では, 例えば施(1999)が国際結婚夫婦を対象に質問紙調査を行い, その有効回答95ペアを用いて国際結婚夫婦のコミュニケーションの実態を明らかにしている。後者の例では, 矢吹(1998)が, 日米夫婦と日日夫婦それぞれ8組に対し面接調査を行い子育て観の違いを検討している。その結果, 日日夫婦の夫は子どもに対して間接的に関わろうとするのに対し, アメリカ人夫のアプローチはより直接的であることが示されている。また, 国際結婚から生まれた国際児と呼ばれる子どもたちの実際を調査した研究も登場する(原, 1996; 新田, 1996; 植木・村上, 1996など)。まとめると, 90年代の特徴として, 80年代に盛んだった法律問題を扱う報告が目立たなくなり, 国際結婚家族の諸問題を社会的切り口で検討した研究や実際に国際結婚夫婦を参加者として招き入れた研究報告が増え始めたことが挙げられる。

2000年代に入り, ヒット数は143件とさらに増加する。外国人妻へのDVや適応に関する研究, 国際結婚の歴史, 異文化理解としての国際結婚の考察が発展しているほか, 国際結婚夫婦のコミュニケーションに焦点を当てた研究(伊藤, 2009; 滝川, 2006など)は顕著に増加している。例えば滝川(2006)の日米夫婦の事例研究では, 結論は最後に言う積み上げ型で話を進め, 文脈から聞き手が理解できるようなコミュニケーションスタイルを取り, 相手にも同様に求める日本人妻と, 結論先行型で重要点をはじめにはっきり表現する米国人夫との間で軋轢が生じやすい結果が報告されている。同時に, 国際結婚とともに増加している国際児への言語教育や文化継承問題に関する研究も増えている(花井, 2009; 鈴木, 2004; 2007)。方法論は主に事例研究が主流(工藤, 2009; 松本, 2004; 鈴木, 2004; 吉田, 2001など)である。

最後に, 2010年から現在(2016年9月時点)までの文献数は132であった。5年半の経過で2000年代の総数を上回っており過去最高の数量になることは間違いない。2000年代に引き続き, 国際結婚夫婦の価値観やコミュニケーションについて研究したもの(柿原, 2011; 古波藏, 2010; 矢吹, 2012など)のほか, 国際児の言語教育や社会化に関する研究も報告されている(戴, 2016; 鈴木, 2013など)。さらに, 国際結婚と地域の関連を扱ったもの(早田, 2010; 西原, 2012など)が登場している。ますます多文化が発展する地域社会の一部としての国際結婚の諸相を考察するというのが今後の全体的な流れに見受けられる。

2.3. まとめ

国際結婚に関する国内での研究は海外での研究に比較し遅れを取っている。海外では1870年代に遡り、ハワイ大学での異人種間カップルの研究が端を発し、70年代から盛り上がりを見せている。大きな流れとしては海外での先行研究に倣うように、初期は法律などの社会的問題や精神病理に関するものが多いほか、形式も評論や統計データのまとめが大半であった。しかしその後徐々に、ようやく当事者である夫婦に直に光を当てた研究が登場し、学術的な研究が増加していく。その内容の大部分が外国人妻の適応、国際結婚夫婦間の言語、コミュニケーションや価値観の相違である。方法論も質問紙調査、事例研究、面接と多様化しているが、サンプルの少なさから量的調査に乏しく事例研究が多いのが現状である。そして、研究の関心は、コミュニティの中の国際結婚や国際児の社会化へとシフトし始め、多文化化していく地域社会での国際結婚の役割に関するテーマへと広がりがつつある。

3. 今後の展望

これまで国内外での国際結婚並びに異人種異民族間カップルに関する文献の動向を概観してきた。本節ではその過程で見いだされた今後の国際結婚に関する研究の課題を述べる。課題は主に5つである。

まず一つ目は、このテーマに関する研究量の圧倒的な少なさである。国内外を問わず、国際結婚並びに異人種異民族間カップルというテーマにも関わらず、実際にこうしたカップルを対象にした研究は依然乏しいという点である。量的調査も非常に少なく多くがケーススタディである。今後質的研究から示唆された仮説を検証する量的研究やサンプル数を増やした質的研究の蓄積が不可欠である。尚、異文化間で結婚した夫婦がどう“文化の溝”や“個人の溝”のはざまで、折り合いをつけ成長していくのかといったプロセスに着目した研究はほとんど見受けられない。定点観測的な調査のほか、こうした社会化のプロセスに焦点を当てた研究の積み重ねが必要である。さらに、個人はミクロシステム、メゾシステムといった幾重もの環境と相互作用しながら発達するといわれているが (Bronfenbrenner, 1986)、異文化間夫婦においてはその相互作用の複雑さが指摘されている (Seshadri & Knudson-Martin, 2013)。今後は家族内の相互作用だけではなく、家族を取り巻く様々なシステムとの相互作用を見ていく必要がある。

二つ目は、ライフサイクルという視点の重要性である。個人の発達を説明するためにハヴィグーストの発達課題 (1972/1997)、エリクソンの心理社会的発達理論 (1982/1989) やピアジェの認知発達理論が参照されるように、家族を“一つの集団が発生して消滅するまでの変化の過程を生命体” (川野・櫻井, 2010, p. 47) としてとらえ、特有の発達段階と課題があると想定している。家族のライフサイクルには結婚、第一子の誕生、教育期、子どもの独立といったいくつかの典型的な段階が想定されている (Carter & McGoldrick, 2005; Duval, 1967; Friedman, 1986/1993; 森岡・望月,

2014)。そして、そのライフステージの移行期に、家族は危機に陥りやすいとされている (Carter & McGoldrick, 2005; Cowan & Cowan, 1999; Cowan, Cowan, & Heming, 2005; Cowan and Hetherington, 1991; 山本・ワップナー, 1991)。それは、家族成員たちが個人の発達に加え、ライフステージに伴った生活世界の広がりより空間的、物理的、対人的、そして社会的システムの変化に家族全体として適応を余儀なくされるからである。そこへ複数の文化が交叉する家庭ではそのプロセスはより複雑化したものになる。しかしながら、多文化家庭における移行期については、国内外問わずこれまでほとんど研究の対象とされてきていない。今後、ライフサイクルとその移行期における相互作用に着目した研究の活性化が必要である。

三つ目は多くの国内研究は夫婦単位か妻を対象としているものが大半である点である。つまり外国人夫を対象にした研究はほとんどないのである。Kuramoto (2016) では、日本に居住し日本人妻と子どもを育てている外国人夫の適応プロセスと文化的アイデンティティの揺れを検討した。多くの外国人夫はマージナリティや文化間葛藤を抱えながらも、母親である日本人妻を尊重し自分の文化的アイデンティティを調節し家族の中そしてコミュニティの中での立ち位置を獲得しようと奮闘している。外国人妻への支援に関する研究は2.2で概観した通り、比較的多く行われているが、外国人夫はほとんどその対象に入っていない。今後外国人夫にも焦点を当てた研究の蓄積が期待される。

四つ目は国際結婚に影響する様々な属性の影響である。例えば、今日の日本の多くの国際結婚研究ではその社会階層や地域を統制していない。収入の高低や住んでいる地域の発展度によって、国際結婚の諸相はずいぶん異なってくると考えられる。今後はそうした様々な形態の国際結婚の問題とリソースを明らかにし、あらゆる国際結婚家族への支援に活かしていくことが必要である。

最後の五つ目はカップルセラピーに関する研究である。海外では70年代から異人種異民族間カップルへの臨床に関する研究が蓄積されている (Atkeson, 1970; Biever, Bobele, & North, 1998; Ibrahim & Schroeder, 1990; Kim, Prouty, & Robertson, 2012; Leslie & Young, 2015; Osuji, 2014; Wold, Yoon, & Mayo, 1977など)。家族臨床及びカップルセラピーに関するハンドブックには必ず異人種異民族間カップルのケースのための章が独立に設けられていることが多い (Falicov, 1986など) ほど、欠かせないものになっているし、多くの臨床系のテキストでは家族と「文化」はセットで扱われる (Carter & McGoldrick, 2005; McGoldrick & Giordano, 2005; Nichols & Schwartz, 2005など)。それに対して、わが国では、夫婦関係に関する実証的研究は比較的進んでいるもの、野末 (2012) が「未だマイナーなアプローチ」と嘆いているように、カップルを一つの単位として扱う心理臨床的研究 (野末, 2011; 2016など) については十分ではないのが現状である。ましてや、国際結婚夫婦を対象としたカウンセリング研究は皆無に等しい。今後ますます増えてくる国際結婚夫婦の支援につなげるためにも、二つの文化の相互作用に注意を払うことができるカウンセラーの養成が必要になってくるだろう。

国際結婚の広がりとは現代社会の産物であり、異文化出身同士の夫婦と家族について研究することの意義がますます高まるだろう。さらに、異文化間で結婚生活を営む夫婦の適応プロセスは、多文化共生時代を生き抜く上で必要となるヒントを与えてくれる。これからますます多様化する社会で

大きな役割を果たしていくことだろう。

文献

- Adams, R. (1937). *Interracial marriage in Hawaii*. New York, NY: Macmillan.
- Annella, M. (1956). Some aspects of interracial marriage in Washington, D.C. *Journal of Negro Education*, 25, 380-391.
- Atkeson, P. (1970). Building communication in intercultural marriage. *Journal for the Study of Interpersonal Processes*, 33, 396-408.
- Biever, J. L., Bobele, M., & North, M. W. (1998). Therapy with intercultural couples: A postmodern approach. *Counselling Psychology Quarterly*, 11, 181-188.
- Bhugra, D., & De Silva, P. (2000). Couple therapy across cultures. *Sexual and Relationship Therapy*, 15, 183-192.
- Bourgeois, M., & Hebert, A. (1969). Interracial marriage and its psychopathology. *Annales medico-psychologiques*, 1, 427-438.
- Bratter, J. L., & King, R. B. (2008). "But will it last?" : Marital instability among interracial and same-race couples. *Family Relations: An Interdisciplinary Journal of Applied Family Studies*, 57, 160-171.
- Bratter, J. L., & Eschbach, K. (2006). What about the couple? Interracial marriage and psychological distress. *Social Science Research*, 35, 1025-1047.
- Brighgham, J. C., Woodmansee, J. J., & Cook, S. W. (1976). Dimensions of verbal racial attitudes: Interracial marriage and approaches to racial equality. *Journal of Social Issues*, 32, 9-21.
- ローズマリーブレージャー・ロザンナヒル (2005) . 異文化結婚－境界を越える試み 新泉社
- Brunsma, D. L. (2007). Navigating interracial borders: Black-white couples and their social worlds. *Contemporary Sociology*, 36, 333-334.
- Bronfenbrenner, U. (1986). Ecology of the family as a context for human development: Research perspectives. *Developmental Psychology*, 22, 723-742.
- Bustamante, R. M., Nelson, J. M., Henriksen, R. C., & Monakes, S. (2011). Intercultural couples: Coping with culture-related stressor. *The Family Journal*, 19, 154-164.
- 陳 華毅 (1999). 5. 国際結婚の例からみた中国人と日本人の習慣の違いによるストレス 第45回日本心身医学会東北地方会演題抄録, 39, 476.
- Carter, B., & McGoldrick, M. (Eds.) (2005). *The expanded family life cycle: Individual, family, and social perspectives*. Boston, MA: Allyn & Bacon.
- Cottrell, A. B. (1990). Cross-national marriages: A review of the literature. *Journal of Comparative Family Studies*, 21, 151-169.
- Cowan, C. P., & Cowan, P. A. (1999). *When partners become parents: The big life change for couples*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cowan, P. A. & Cowan, C. P. (2003). Normative family transitions, normal family processes and health child

- development. In F. Walsh (Ed.), *Normal family processes: Growing diversity and complexity* (pp. 375-398). New York, NY: Guilford Press.
- Cowan, C. P., Cowan, P. A., & Heming, G. (2005). Two variations of a preventive intervention for couples: Effects on parents and children during the transition to school. In P. A. Cowan, C. P. Cowan, J. C. Albrow, V. K. Johnson, & J. R. Measelle (Eds.), *The family context of parenting in children's adaptation to elementary school* (pp. 277-318). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cowan, P. A., & Hetherington, M. (Eds.). (1991). *Family transitions*. Hillside, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Crohn, J. (1998). Intercultural couples. In M. McGoldrick (Ed.), *Revisioning family therapy: race, culture, and gender in clinical practice* (pp.295-308). New York, NY: Guilford press.
- 戴 寧 (2016). 日中国際児の「資源」としての多重文化的家庭環境：国際結婚家庭に生まれた子どもの自己形成プロセスを事例に 日本文化人類学会大会発表要旨集, 2016 (0), C09.
- Duvall, E. M. (1967). *Family development*. Philadelphia, PA: J. B. Lippincott.
- Erikson, E. H. (1982). *THE LIFE CYCLE COMPLETED*. New York, NY: W. W. Norton. (エリクソン,E.H. 村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) (1989) . ライフサイクル, その完結 みすず書房)
- Falicov, C. J. (1986). Cross-cultural marriages. In N. S. Jacobson & A. S. Gurman (Eds.), *Clinical Handbook of Marital Therapy* (pp. 429-450). New York, NY: The Guilford Press.
- Friedman, M. M. (1986). *Family Nursing: Theory and assessment*. Stamford, CT: Appleton & Lange. (フリードマン, M. M. 野嶋 佐由美 (監訳) (1993). 家族看護学：理論とアセスメント へるす出版)
- Fusco, R. A. (2010). Intimate partner violence in interracial couples: A comparison to White and ethnic minority monoracial couples. *Journal of Interpersonal Violence*, 25, 1785-1800.
- Gaines, S. O. Jr., & Ickes, W. (1997). Perspectives on interracial relationships. In S. Duck (Ed.), *Handbook of personal relationships: Theory, research and interventions* (pp. 197-220). Chichester, UK: Wiley.
- Gains, S. O., Granrose, C. S., Rios, D. L., Garcia, B. F., & Youn, M. S. P. (1999). Patterns of attachment and responses to accommodative dilemmas among interethnic/interracial couples. *Journal of Social and Personal Relationships*, 16, 275-285.
- Galinsky, A. D., Hall, E. V., & Cuddy, A. J. C. (2013). Gendered races: Implications for interracial marriage, leadership selection, and athletic participation. *Psychological Science*, 24, 498-506.
- Graham, M. A., Moeai, J., & Shizuru, L. S. (1985). Intercultural marriages: An intrareligious perspective. *International Journal of Intercultural Relations*, 9, 427-434.
- Grick, C. E. (1970). Interracial marriage and admixture in Hawaii. *Social Biology*, 17, 278-291.
- 花井 理香 (2009). 日韓国際結婚家庭児の日本語の継承-日本人母の視座を通して 同志社女子大学大学院文学研究科紀要, 9, 53-73.
- Hancock, W. N. (1879). Suggestions for remedying defects in international marriage as affects women married in the United Kingdom to foreigners. *Journal of the Statistical and Social Inquiry Society of Ireland*, 196-302.
- 原 俊彦 (1996). 国際結婚と国際児の出生動向 家族社会学研究, 8, 81-96.
- Havighurst, R. J. (1972). *Developmental tasks and education (3rd ed.)*. New York, NY: David McKay Company. (ハヴィーガースト, R. J. 児玉 憲典・飯塚裕子 (訳) (1997) . ハヴィーガーストの発達課題と教育 生涯発達と人間形成 川島書店)

- 早田 健文 (2010). 瞭望台湾 国際結婚の増加で変わりゆく人口構造 中国経済, 5, 106-113.
- Hegar, R. L., & Greif, G. L. (1994). Parental abduction of children from interracial and cross-national marriages. *Journal of Comparative Family Studies*, 25, 135-138.
- Hiew, D. N., Halford, W. K., van de Vijver, F. J. R., & Liu, S. (2015). Relationship standards and satisfaction in Chinese, Western, and intercultural Chinese-Western couples in Australia. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 46, 684-701.
- 正田 美津子 (1999). 国際結婚 (2) 農村に「嫁いだ」アジアの女たちのその後 社会民主, 532, 57-61.
- 広田 重道 (1953). 国際結婚を望む女性に 婦人公論, 39, 220-221.
- 藤田 小織 (1997). 統計から見た最近の国際結婚の状況 国際人流, 10, 36-40.
- Ibrahim, F. A., & Schroeder, D. G. (1990). Cross-cultural couples counselling: A developmental, psychoeducational intervention. *Journal of Comparative Family Studies*, 21, 193-205.
- 伊藤 孝恵 (2009). 国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識-「夫日本人, 妻外国人」夫婦の夫婦単位での特徴を中心に 言語文化と日本語教育, 38, 20-29.
- Johnson, R. C., & Nagoshi, C. T. (1986). The adjustment of offspring of within-group and interracial/intercultural marriages: A comparison of personality factor scores. *Journal of Marriage and the Family*, 48, 279-284.
- Inman, A. G., Altman, A., Kaduvettoor-Davidson, A., Carr, A., & Walker, J. A. (2011). Cultural intersections: A qualitative inquiry into the experience of Asian Indian-White interracial couples. *Family Process*, 50, 248-266.
- 柿原 武史 (2011). 日本における国際結婚夫婦の言語使用について-日本人配偶者から見た言語使用の実態 大分大学経済論集, 63, 71-94.
- Karis, T. A., & Killian, K. D. (2009). *Intercultural couples*. New York, NY: Routledge.
- 川野 雅資・櫻井 しのぶ (2010). 家族看護学 (pp.47) Pilar Press
- Kellner, J. (2009). Gender Perspective in Cross-cultural couples. *Clinical Social Work*, 37, 224-229.
- Killian, K. D. (2002). Dominant and marginalized discourses in interracial couples' narratives: Implications for family therapists. *Family Process*, 41, 603-618.
- Kim, H., Prouty, A. M., & Robertson, P. N. E. (2012). Narrative therapy with intercultural couples: A case study. *Journal of Family Psychotherapy*, 23, 273-286.
- Kitano, H. H., & Chai, L. K. (1982). Korean interracial marriage. *Marriage & Family Review*, 5, 75-89.
- Kitano, H. H., Yeung, W.-T., Chai, L., & Hatanaka, H. (1986). Asian-American interracial marriage. *Asian American Psychological Association Journal*, 1986, 30-32.
- 厚生労働省 (1990). 国際結婚-人口動態統計からみた日本人と外国人の婚姻 (資料), 37, 39-46.
- 厚生労働省 (2016). 人口動態調査 厚生労働統計一覧
<https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL02020101.do?method=extendTclass&refTarget=toukeihyo&listFormat=hierarchy&statCode=00450011&tstatCode=000001028897&tclass1=000001053058&tclass2=000001053061&tclass3=000001053069&tclass4=&tclass5=>> (September 7, 2016)
- 工藤 正子 (2009). 関東郊外からムスリムとしての居場所を築く: パキスタン人男性と日本人女性の国際結婚の事例から (<特集>多文化共生と文化人類学) 文化人類学, 74, 116-135.

- 国見 章子 (1989). 過疎地域における国際結婚女性の妊娠, 分娩にかかわって 日本看護学会20回集録 母性看護, 1989, 164-167.
- 古波蔵 香咲花 (2010). 国際結婚家族の現状と課題に関する一考察: 沖縄県における事例から 沖縄大学人文学部紀要, 12, 95-108.
- 蔵本 真紀子 (2015). 子育て期異文化間夫婦の葛藤体験と適応プロセス 青山学院大学大学院教育人間科学研究科修士論文
- Kuramoto, M. (2016). Living overseas as a foreign father in an intercultural marriage: Cultural identity equilibrium acquisition. *Journal of Intercultural Communication*, 19, 27-50.
- Leslie, L. A., & Letiecq, B. L. (2004). Marital quality of African American and white partners in interracial couples. *Personal Relationships*, 11, 559-574.
- Leslie, L. A., & Young, J. L. (2015). Interracial couples in therapy: Common themes and issues. *Journal of Social Issues*, 71, 788-803.
- Lewandowski, D. A., & Jackson, L. A. (2001). Perceptions of interracial couples: Prejudice at the dyadic level. *Journal of Black Psychology*, 27, 288-303.
- Majete, C. (1997). What you may not know about interracial marriages. *The World and I*, 12, 300-311.
- Mann, E., & Waldron, J. A. (1977). Intercultural marriage and child rearing. In W. S. Tseng, J. F. McDermott, & T. W. Maretzki (Eds.), *Adjustment in intercultural marriage* (pp. 62-80). Honolulu, HI: University of Hawaii.
- Mansikka, U., & Fukuyama, M. A. (1985). Communication training for intercultural couples. *Journal of College Student Personnel*, 26, 254-255.
- Marcson, S. (1953). Predicting intermarriage. *Sociology & Social Research*, 37, 151-156.
- Martelle, D. L. (1970). Interracial marriage attitudes among high school students. *Psychological Reports*, 27, 1007-1010.
- Melon, D. L. (1972). A study of the psychopathology of interracial marriage. *Feuillets Psychiatriques de Liege*, 5, 5-14.
- 松本 佑子 (2004). 国際結婚とドメスティックバイオレンス: アジア系外国人女性の事例を中心に 聖徳大学尋問学部研究紀要第一分冊, 15, 55-62.
- McGoldrick, M., & Giordano, J. (2005). Overview: Ethnicity and family therapy. In M. McGoldrick, J. Giordano, & J. K. Pearce (Eds.), *Ethnicity and family therapy* (2nd ed., pp. 1-27). New York, NY: Guilford Press.
- Monahan, T. P. (1970). Interracial marriage: Data for Philadelphia and Pennsylvania. *Demography*, 7, 287-299.
- 森岡 清美・望月 嵩 (2014). 新しい家族社会学 培風館
- 中沢 進之右 (1996). 農村におけるアジア系外国人妻の生活と居住意識-山形県最上地方の中国・台湾, 韓国, フィリピン出身者を対象にして (特集2 わが国における国際結婚とその家族をめぐる諸問題) 家族社会学研究, 8, 81-96.
- Negy, C., & Snyder, D. K. (2000). Relationship satisfaction of Mexican American and non-Hispanic White American interethnic couples: Issues of acculturation and clinical intervention. *Journal of Marital and Family Therapy*, 26, 293-304.
- Nguyen, N. H. C. (2009). Vietnamese Women: Narratives of cross-cultural marriage. *Intersections: Gender and Sexu-*

ality in Asia and the Pacific, 21, 1-12.

Nichols, M. P., & Schwartz, R. C. (Eds.). (2005). *The Essentials of Family Therapy* (2nd Ed.) New York, NY: Pearson Education.

西原 純 (2012). 国際結婚の進展とその地域差・地理的な背景要因 (特集 日本の外国人) 統計, 63, 23-29.

新田 文輝 (1996). 国際児の社会化-言語的社会化と兄弟姉妹差を中心に (特集2 わが国における国際結婚とその家族をめぐる諸問題) 家族社会学研究, 8, 97-109.

野田 愛子 (1971). 「国際結婚-財産上の地位に関する諸問題」の討議について (第13回IBA東京大会報告書・第3議題) 法の支配, 21, 45-51.

Norton, S. M. (1970). Interracial marriages in Maryland. *Public health reports*, 85, 739-747.

野末 武義 (2011). 親密性の危機としてのフリントカップル・セラピー 平木 典子・中釜 洋子・友田 尋子 (編) 親密な人間関係のための臨床心理学-家族とつながり, 愛し, ケアする力 (pp. 17-29) 金子書房

野末 武義 (2012). 夫婦関係 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩, 51, 109-136.

野末 武義 (2016). カップルセラピーのメリットと難しさ 家族療法研究, 33, 84-87.

大西 守 (1987). 国際結婚をめぐる精神障害例 精神科治療学, 2, 425-431.

大西 守・山寺 亘・中山 和彦 (1995). 国際結婚例における心身医学的問題 (変貌する家族関係と健康問題) (第35回日本心身医学会総会) 35, 229-233.

Osuji, C. (2014). Divergence of Convergence in the U. S. and Brazil: Understanding race relations through white family reactions to black-white interracial couples. *Qualitative Sociology*, 37, 93-115.

Paset, P. S., & Taylor, R. D. (1991). Black and White women' s attitudes towards interracial marriage. *Psychological Reports*, 69, 753-754.

Porteus, S. D. (1939). Review of Interracial marriage in Hawaii. *Psychological Bulletin*, 36, 135-137.

Rankin, R., & Maneker, J. (1987). Correlates of marital duration and black-white intermarriage in California. *Journal of Divorce*, 11, 51-67.

Ratiff, B. W., Moon, H. F., & Bonacci, G. A., (1978). Intercultural marriage: The Korean-American experience. *Social Casework*, 59, 221-226.

Rho, J. J., & Schumm, W. R. (1989). The factorial validity of brief satisfaction scales in a survey of 58 Korean-American interracial couples. *Psychological Reports*, 65, 1347-1350.

Risdon, R. (1954). A study of interracial marriages based on data for Los Angeles County. *Sociology & Social Research*, 39, 92-95.

Romano, D. (2001). *Intercultural marriage: Promises and pitfalls* (2nd ed.). Yarmouth, ME: Intercultural press, Inc.

Rosenblatt, P. C., & Stewart, C. C. (2012). Challenges in Cross-Cultural Marriage: When she is Chinese and he Euro-American. *Sociological Focus*, 37, 43-58.

Salgado de Snyder, V. N., & Amado, M. (1982). Interethnic marriages of Mexican Americans after nearly two decades. *Spanish Speaking Mental Health Research Center Occasional Papers*, 15, 18.

佐藤 隆夫 (1989). 農村における国際結婚の問題点-1- 法律の広場, 42, 84-86.

- 佐藤 隆夫 (1990). 農村における国際結婚の問題点-2- 法律の広場, 43, 60-63.
- Seshadri, G., & Knudson-Martin, C. (2013). How couples manage interracial and intercultural differences: Implications for clinical practice. *Journal of Marital and Family Therapy*, 39, 43-58.
- Salgado de Snyder, V. N., Lopez, C. M., & Padilla, A. M. (1982). Ethnic identity and cultural awareness among the offspring of Mexican interethnic marriages. *The Journal of Early Adolescence*, 2, 277-282.
- Saucier, J. F. (1967). Psychiatric aspects of interethnic marriage: Pilot study. *Social Psychiatry*, 22, 72-80.
- Saucier, J. F. (1970). Psychodynamics of interethnic marriage. *The Canadian Psychiatric Association Journal / La Revue de l' Association des psychiatres du Canada*, 15, 129-134.
- Sharaievska, I., Kim, J., & Stodolska, M. (2013). Leisure and Marital satisfaction in intercultural marriages. *Journal of Leisure Research*, 45, 445-465.
- 施 利平 (1999). 国際結婚夫婦のコミュニケーションにおける言語能力の役割 年報人間科学, 20, 421-438.
- Solsberry, P. W. (1994). Interracial couples in the United States of America: Implications for mental health counseling. *Journal of Mental Health Counseling*, 16, 304-318.
- Sung, B. L. (1990). Chinese American intermarriage. *Journal of Comparative Family Studies*, 21, 337-353.
- 鈴木 一代・藤原 喜悦 (1994). 国際家族の子どもの教育についての考え方—父親の場合について— 東和大学紀要, 21, 183-198.
- 鈴木 一代 (2004). 「国際児」の文化的アイデンティティ形成：インドネシアの日系国際児の事例を中心に 異文化間教育, 19, 42-53.
- 鈴木 一代 (2007). 国際家族における言語・文化の継承—その要因とメカニズム— 異文化間教育, 26, 14-26.
- 鈴木 一代 (2013). グローバル化社会と多元的アイデンティティ：国際結婚者と国際児の場合 埼玉学園大学紀要人間学部篇, 13, 97-106.
- 滝川 禪 (2006). 異文化間コミュニケーションにおける誤解の構造 大阪女学院大学紀要, 3, 15-24.
- 滝沢 敬一 (1948). 国際結婚をのぞく 朝日評論, 3, 52-54.
- 竹下 修子 (1997a). 国際結婚カップルの異文化適応に関する研究 現代の社会病理, 12, 91-102.
- 竹下 修子 (1997b). 国際結婚カップルの結婚満足度 ソシオロジ, 42, 41-57.
- 竹下 修子 (1998). 国際結婚に対する社会の寛容度—結婚満足度の規定要因の分析から— ソシオロジ, 45, 55-68.
- 竹下 修子 (2000). 国際結婚の社会学 学文社
- 竹下 修子 (2004). 国際結婚の諸相 学文社
- 植木 武・村上 征勝 (1996). 新国籍法における国際児の意識調査—国際選択を中心に 文部省科学研究費補助金・研究成果報告書
- Vaquera, E., & Kao, G. (2005). Private and public displays of affection among interracial and intra-racial adolescent couples. *Social Science Quarterly*, 86, 484-505.
- Wold, C. N., Yoon, S-C., & Mayo, S. (1977). Marital therapy with a Vietnamese couple: A cross-cultural mélange. *Family Therapy*, 4, 237-246.

- 矢吹 理恵 (1997). 日米国際結婚における夫婦間の調整課題：性役割観を中心に 発達研究, 12, 37-50.
- 矢吹 理恵 (1998). 日米国際結婚における夫婦間の調整課題 (2)：子育て観を中心に 発達研究, 13, 26-44.
- 矢吹 理恵 (2011). 国際結婚の家族心理学—日米夫婦の場合— 風間書房
- 矢吹 理恵 (2012). 日米国際結婚夫婦における葛藤課題の調整過程：課題の認知の言語化をめぐる質的分析 家族心理学研究, 26, 54-68.
- 山本 多喜司・ワップナー S. (1991). 人生移行の発達心理学 北大路書房
- Yeh, Y-C. (2014). Literacy education for nursery school children of cross-national marriages in Taiwan. *Education*, 3, 89-100.
- 吉田 正紀 (2001). 国際結婚にみる異文化交流と実践 (1) インドネシアに嫁いだ日本女性の事例から 国際関係研究, 22, 137-163.